

「キャンプとお手伝いの旅」

やらされから自立へ……

16日間のドラマ

二十七人の子どもたちが
自分と向き合う。仲間と向き合う。
それぞれの場で「自分の役割」を果たすことで、
働き方や生き方の多様性を知る。
それが、「キャンプとお手伝いの旅」だ！



参加者の声

自分たちで作った「粟島名物わっば煮」は最高！

僕たちの実施した夢の活動プログラムは、「わっば煮」作りです。

島民に作り方や必要な道具を聞いて、リヤカーを引いて材料を海岸まで運びました。魚は、朝早く魚市場に行って自分たちで買ってきました。

鍋に熱くした石をいれるだけで煮えるなんてすごいと思いました。みんなで一緒に準備し作業し協力して作った「わっば煮」は本当においしかったです。



相手の気持ち・自分の気持ち

第一ステージ
(七月二十八日～三十一日)

4日間

「こんにちは！」と元気な声。子どもたちが妙高の森に集まってきた。遠くは徳島・茨城など八都県から参加した二十七人の小学四～六年生である。

今日から二十七人の子どもたちはチームとして、一班五～六人(学年・男女混合)に分かれ、キャンプカウンセラーと共に活動していく。

次の日の朝からキャンプ生活のための準備がはじまった。森の中に声が響く。「何やってるの、こらやってやるの」、「誰か手のあいている人いない、俺二個も無理だよ、手伝ってよ」生活の場を築くというひとつの目標に向かって動き始めている。

しかし、おもしろいものである。三・四日経ち、一層仲間同士の距離が縮まるとお互いに言いたいことを言うようになる。自分・仲間・班の「オモイ」が混在し、言い争いやけんかなどといった「カタチ」として表面化してくる。

ある班のふりかえりでの一場面である。
「俺ら、けんかしてはらばらだったけど、明日は、けんかにならないようにしようよ。」
「何でけんかするのかな?」
「あんな高いところにいたクワガタ、みんなで作戦立てて採れたのに……」

自分たちの班の体験(ものすごく高いところにいたクワガタを自分たちの手でとったという事実)・(けんかをしてはらばらになったこと)を考えながら明日の自分たちのあるべき姿をひとりひとりが話していた。成功やつまずきを繰り返して

へと繋げていく。これが「妙高体験学習法」のすばらしさの二つである。

家族のひとりとして、自分の役割を果たす……

第二ステージ
(八月一日～四日)

4日間

阿賀町での民家宿泊体験。それは、子どもたちにとって家庭生活の大切さと家族としての自分の役割を知るための最大手段である。私たちはこのように考え、三泊四日の民家宿泊体験を組んでいる。

民家宿泊先の家族の皆さんは、本当の家族のように接してくれた。時に優しく受け止め、時に厳しく突き放す。そんな様子が子どもたちの話や写真から伺えた。

「梅干しを広げて天日干した」「ドライバーを片手に机を組み立てた」「大きなざるを片手に畑に行くとトマトやきゅうりを収穫した」「鎌で畝をつくった」等、子どもたちはそれぞれの家庭でお手伝い・仕事をして生活してきた。

四日後、それぞれお世話になった家族の方に送ってもらい帰ってきた子どもたちは、「初めて縄を作ったよ」「自分でとった、とうもろこしでスープ作ったんだよ」「お手伝いした時に、『ありがとう』と言われて、うれしかった」等とカウンセラーに話をしていた。

夕方、皆さんをお招きして「ありがとこの会」が開かれ、子どもたちの手料理が振る舞われた。「四日間たのしかったです。おいしいごはんありがとございました」の感謝の言葉が壁に飾られていた。



